

図書 紹介

「不祥事は、誰が起こすのか」

著：植村修一(大分県立芸術文化短期大学)

発行：日本経済新聞出版社／〒100-8066 東京都千代田区大手町 1-3-7／

電話 03-3270-0251／新書判／236 頁／価格 850 円（税別）／2014 年 9 月 8 日発行

データの捏造や改竄、毒物混入、偽装表示、汚染水漏れ、爆発や衝突事故、反社会勢力等々組織の不祥事が次々と起きている。テレビや新聞でこのような不祥事の報道に接する機会が多くなり、不祥事が多発しているように見られるが、実際には明るみになりやすくなってきたことが一因である。

不祥事とは何か、なぜ起こるのか、どうすれば防ぐことができるのかを著者自身の経験も踏まえ、多くの事例を紹介し、不祥事発生のメカニズムと防止法が解説されている。

第 1 章 不祥事を育む土壌

第 2 章 偽装事件は平安時代にも一歴史に学ぶ

第 3 章 落とし穴にはまる企業

第 4 章 オオカミ少年が安全を守る

第 5 章 落とし穴にはまる人々

第 6 章 不祥事の種は大きく広がる

第 7 章 金融に不祥事はつきもの

第 8 章 不祥事をデータで捉える

終章 不祥事をどうやって防ぐか

サブタイトルを見ていくと、第 1 章は、池も組織も必ず澱むーかいぼりのリスク／『正しい』は『好き』の言い換えにすぎない／創業者の重みと会社の私物化／強いリーダーシップ、強すぎるリーダーシップ／安全意識はなぜ緩んだかー化学プラント事故の背景／血の池地獄かブルー・オーシャンか／銀行にブルー・オーシャンはあるのか／日銀にも派閥？／ゾウの時間ネズミの時間と組織の規模／倫理の死角／注目される第三者委員会で、第 2 章は、世界史を動かした不祥事／ならぬことはならぬものです／ブラックボックスは不正のもと／組織にとってのレーダーとは／「奨励の文化」で最悪だった国は・・・／日本軍の特徴、日本人の特徴／「空気」による支配の二重性である。

第 3 章は、懲りない企業／なぜ粉飾するのか／決まり文句、「関係の皆様方」が見逃すもの／外からのチェック、内からのチェック／少しの努力で防げること／組織全体の「感

度」はどう失われるのか／人任せの危険／動機がわからない虚偽報告の真相、第4章は、暗黙のプレッシャーが事故につながる／安全とレッド・オーシャン／人選ミスが巨事故を招く／緊急時の意思決定はどうする／殷鑑遠からず／再び現場からの乖離／利益相反とは／第二の疑惑／魚心あれば水心／「オオカミ少年」でかまわない、第5章は、統一球問題の背景にあるもの／ミスへの厳格なプレッシャーが隠蔽を生む／「まさか」ですまされない緊張感の欠如／不祥事は「あってはならない」ことか／しがらみの中で／官公庁を巡るしがらみ／しがらみの本質／職員研修旅行のどこが問題か／事故から身を守るのは「謙虚さ」である／「自分は大丈夫」の落とし穴／である。

第6章は、日本だけが「特殊」な経済犯罪の実態／不祥事のグローバルゼーション／ネットの恐ろしさ／ネットを弄ぶ者はネットに弄ばれる／システムは人任せ／委託、再委託、再々委託／情報にもトレスビリティか／コンピューターを用いた不祥事からコンピューターによる不祥事へ、第7章は、バブルに不祥事はつきものか／計量化の「畏」／審判員が不正／情報の生産活動と不祥事／なぜ金融に倫理が必要か、第8章は、不正を抑制する手段／ビッグデータの時代はここにも／ベイで不祥事がわる／邦銀のオペレーショナルリスクは他等に小さいのかである。

終章は、「コックピット」は凝縮された世界／コーポレートガバナンスと不祥事／内部監査のススメ／企業買収と価値観共有の難しさ／外部の目を活用して退路を断つ／不祥事の本質／不祥事防止のための10か条である。

人間は万全ではない。社会的な関係は利害が対立することがしばしばあり、正論より「大人の事情」が優先されことも多く、また、組織の内外にしがらみ構造が存在するため、きれいごとばかり言っていると不祥事は隠蔽されることにもなる。

著者は、不祥事の防止には、「謙虚な発想で身を律すること」であり、日頃から過去の不祥事からの教訓を生かし、再び起こるものだと考えて対策を取っていくことが必要であると結論付けている。

おわりに会員諸氏にとっては参考になるとと思われる不祥事防止のために普段気をつけてほしい著者の10か条を挙げる(学会事務局)。

第1条「人は弱い、必ずミスをする」

第2条「予兆を見逃すな」

第3条「システムにバグはつきもの」

第4条「権威勾配の傾きに気をつける」

第5条「挙証責任を転嫁するな」

第6条「ルールは守れ」

第7条「正論を大事にしろ」

第8条「副作用には気をつけろ」

第9条「組織文化を自覚しろ」

第10条「大事なことを忘れるな」